

優秀賞（水の週間実行委員会会長賞）

命を育む水

今から二年前の梅雨、その事件は起きた。我が家の裏には溜め池がある。その年は空梅雨で、まったくといっていいほど雨が降らなかった。近所の田んぼには水が必要であるから、そこから水は引かれる。補充はない。必然的に、池は徐々に水位を下げ始めた。池が危機に陥ったのだ。

棲んでいる昆虫や魚類、ザリガニなどの甲殻類も酸欠で水面へと上がってきた。とうとう池の水位も一〇分の一程度となり、少なくなつた水面に、その亡骸をさらすものも現れだした。

見かねた私たち家族は、夕方になるとバケツに水をくみ池に運んだ。「焼け石に水」、このぐらいではどうにもならないことはわかっていた。だがじっとしてはいられなかったのだ。幼いころから見てきた池。そこに棲むザリガニなどに夢中になり、時間を過ごした場所。今ではあまり見かけることができなくなったトンボたち（コシアキトン



熊本県 熊本市立三和中学校

二年 北口 明奈

ボ、オニヤンマなど）を、どうしても守りたいと思った。

母は市役所や博物館、いろんなところにどうにかならないかと電話をかけた。だが、私たちの望む答えはなかなか返ってこなかった。「自然のことですからねえ……」と。

私たちは、何かできないかと思い、家にある大きな水そうやバケツなどあらゆる入れ物に、魚やザリガニをいったん避難させることにした。悪臭はしたが、必死に虫とり網などを使って救助した。恵みの雨が降るまでと思い……。だが、すぐには降らなかった。

見かねた父が、職場から週末限定で長いホースを借りてきてくれた。一晩中水道から水を引いた。その甲斐あって、わずかだが水位が上昇した。水溜りに近い池だが、ほんの少し希望が出てきたように感じた。

次の日、だいぶ悪臭を放っていた魚たちの死骸の除去に市役所の職

員が訪れた。また、近所の人づてで話を聞きつけた、市議会議員さんも訪ねてくれた。善意の輪が広がるのはこのようなことなのだと思った。悪臭のひどい中、胸までつかって魚の死骸を除去して下さった市職員の方には、本当に感謝している。

あとは雨待ちだった。幸いなことにその後二日間、まとまった雨となった。まさに恵みの雨だった。雨が降ってこんなにうれしかったことはなかった。この雨のおかげで、池の水位はほぼ戻った。これにも驚いた。私たちが何日もかかってやったこと、その数倍いや数十倍のことができてしまうのだから。

テレビなどでよく「大自然の驚異」などという。今までは特に気にもかけていなかった。自然の力をすごい、すばらしいと感じることができた。

あれから二年が経つ。あの時池に水を引いたことは、本当に正しかったのだろうか、正直思うことがあった。しかし、今も変わらず、前と同じようにトンボが飛び交い、魚が泳ぎ、カエルの鳴き声が響いているこの池の様子を見ると、よかったのだろうかと思う。

この出来事を通して私を感じたこと。それは、水というのは生命の源だということ。普段から言われていることだが、改めて実感した。すべての生き物は、水無しでは生きていくことはできない。すなわち人間も……。

あの時と同じような異変が今、地球規模で起きている。かつてはきれいな湖だった所が完全に干上がり、あとかたもなく消えてしまったというニュースも報道された。二年前、危機に陥ったロシアキトンボたちと、現在私たちがおかれている状況は、同じなのではないだろうか。守ったつもりだったロシアキトンボたちが、私たちに大切なことを教えてくれたのかもしれない。